

# 博士論文要旨

## 論文題名：日本 SF 文学における音楽 ——文学における「音」と「身体」の考察——

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程  
アンドレウ マルチネズ エステル  
ANDREU MARTINEZ Esther

本論文は、音響文化研究及び文芸音響文化研究を基礎とする学際的なアプローチで、日本の SF 文学作品における音楽を、「音」と「身体」という二つの概念に焦点に当て論じるものである。聴覚にまつわる現象が主体を構築、分解、不安定化させる過程に着目し、〈音〉はどのように概念化され、動物、ジェンダー、他者性、テクノロジー等ほかの諸要素とどのような関連を作り得るのかについて検討する。全体の論に関わる概念的枠組は、序論の中で、音響文化研究、身体をめぐる理論、SF 環境における音楽、そして音楽を扱った SF 作品の紹介を通じて提示される。

本論は二部構成をとる。第一部では音をめぐるテクノロジーに着目し、文字に書き表された音を観察しながら、技術革新と同時進行する身体の捉え方の変化、そしてこの変化に伴う主観性のゆらぎについて検討する。第一章では海野十三の「十八時の音楽浴」(1937 年)を扱い、国民国家に帰属する身体を構成させるための道具として音楽を分析している。音楽は「振動」という物理的現象を通じて身体へと侵入し、先進的に発達した機械文明の下で身体と機械の同一化を押し進める。第二章では、サイバネティクスの発展と関連づけて高野史緒の『ムジカ・マキーナ』(1995 年)を分析する。前章における人体が機械——肉体的労働をこなすマシーン——として概念化されていたとすれば、ここでは脳やその機能がコンピュータの一種とみなされ、人間の脳は録音音源を保管、参照するためのデータベースとして利用されている。第三章で分析する奥泉光の『ビビビ・ビ・バップ』(2014 年)は、シンギュラリティの誕生とともに人間と機械の概念的境界が溶解する現象の最終形態を描き出している。ここでの音楽の探究及び身体は、既成物の反復と再生産という考え方に基づいており、作品が描き出す脱歴史的な社会の徴候として読むことができる。このようにして、音に

焦点を合わせながら、第一部はテクノロジーと身体性の相互的影響関係を議論する。扱われる三作品はそれぞれ、技術革新の歴史における三つの段階と、それに対応した身体概念との関連を象徴している。

第二部は、音による他者への接触の欲動、そして主体性と他者性の構築に焦点を当てる。生と死という対立概念に基づいて構成され、ここで扱う作品には音楽が両概念と共に描かれている。第四章では、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが発展させた「生成変化」という概念から古川日出男の『MUSIC』(2010年)を分析する。ここでは、『MUSIC』における音楽が「世界における(への)存在」を示す、生命そのものの表象であることを論じる。第五章では、上田早夕里の「夢見る葦笛」(2009年)、飛浩隆の「デュオ」(1992年)、栗本薫の「セイレーン」(1979年)を、主体が音楽を媒介として他者からの侵入を受ける物語として読解する。ここでは、他者との接触及び〈音楽／現実世界になる〉ことが主体そのものの消失として理解される時、いかにして死がモチーフとして出現するのかを明らかにする。これらの作品群における、主体性を危険に晒す音楽は、自己と他者の垣根の破壊者となり得る。第二部の作品解釈では、生と死は二項対立的な主題ではなく、他者への接触の欲動を概念化する二つの方法として捉えられることを結論づけた。

扱った作品の分析から、人間の声、楽器、音響機器、動物、エイリアン、都市や宇宙そのものなど、いずれから作り出される音／音楽であったとしても、文学に描かれる音楽は、常に身体を前面へと持ち出す役割を果たしている。その音楽はまた、作品を、身体／主体の揺さぶり、移動、ネットワークの構築、崩壊と分離、組織化と破壊の可能性を孕んだあらゆる〈出会い〉の描写へと導いていることが明らかとなった。